

発達支援部会（22年度第3回）会議録

開催日時：平成22年12月8日（水） 9：30～12：00

場所：一宮市役所 西庁舎 第3会議室

<本日の議事>

1. 各機関の現状分析（健康づくり課）
2. サポートブック作成について

1. 各期間の状況と課題（健康づくり課）

検診の現場から・・・保健センター1歳6か月検診、3歳時検診

データによると、いわゆるグレーゾーン、発達障害の子が増えてきている

問題点 行き場がない 母子通園は満員 行けても内容が合っていない
社会資源がない 選択肢が狭い

見合う資源が必要。民間の児童デイがたくさんありながらも需要が伝わってこない（言葉が出るから・・・とお母さんが受け入れづらい）受給者証の取得もハードルが高い

市単独の事業として受給者の必要のないものは作れないのか？

事例として受給者の取得が困難な地域は単独事業を行っている

既存の子育て支援を活用できないか

- ・受け入れ先もそうだが、子育て支援の中にお母さんにかかわり方育て方相談を受ける場所を作ること（お母さんが通えるメリットが大事。お母さんが通ってよかったと思えるところ）
- ・育てにくさを感じる親だけでなく、障害がある子であろうとそうでない子であろうと先の見通しを伝える方法などの技法を教える場があっても良い。
- ・全部のお母さんが聞いて損をする話ではないので、全員のお母さんに周知する中に、そうした内容を盛り込んでよいと思う
- ・児童館の幼児教室を利用している人も多いが、入れない人も多い。そういう所に行けなかった方が相談できる場所が必要
- ・生涯学習課の「ぴよぴよランド」など、地域にはいろんな未就園児むけのサークルがたくさんある。そういうところが発達すれば気軽に利用できる。手帳をとって母子通園というステップをふまなくてもよくなる

子育て支援にかかわるボランティアを含んだスタッフに発達障害についてよく知ってもらい、利用する方に対応方法を伝えるスキルが必要。

スタッフ対象の定期的な学習会の形づくりができないか

その為には子育て支援課、児童館などの事業団など枠を超えた連携と協力が必要。

てはじめに子育て支援センターの協力を要請してはどうか

2. サポートブックの作成について

前回配布した3タイプを参考に考える

- ・金沢大学・・・コンパクトで携帯しやすい
- ・北名古屋市・・・内容がシンプルにまとめている
- ・にじいろ手帳・・・量が多いが記入しやすい

有効に活用するにはどうあるべきか？

内容としては発達障害に特化したサポートブックにしておくのかも検討する

各委員の意見

本来は目的に合わせて形態を変えるべき。

ライフステージを通して使えるというところから、にじいろ手帳形式が良いと思う。

そのままだと量が多いので、内容を必要最低限のものに絞り、記入しやすいフォームに改良すると活用しやすいのではないかと

北名古屋市の職員に実際にどのように使われているのか聞いたところ1歳半検診でお渡しする予定だったが断念。母子通園から配布。書き方をレクチャーできる体制を整えている。しかし、レクチャーをしているにも関わらず、白紙の方が多い。サイズが大きくて使いにくいという声があがっている。

個別支援会議などの記録、会議の参加メンバーなどを記録できると、支援を繋げてゆく際に有効であると思う

専門用語が入っていると書きにくい

わかっているもどのように書いていいのかかわからないと思うので、書き方見本があると良い
北名古屋市の様に書き方をレクチャーできるサポート体制があると良い

今回のサポートブック作成予算は50万円で今年度限りの単発事業となる。なので、ブック状の製品として作れるのは今回限り。後は予算のかからない方法、例えばネットなどで様式を入手する形式にする方法などが考えられる。また、配布方法も議論していただきたい

検診に来られる乳幼児期においては書くこと自体が難しいと思う。

どの時点でどういったときに必要として、どういった層の人が使いたいのかがわかると良いと思う。みんなが使えて必要な部分だけピックアップするのであれば、バインダー形式にして小さい手帳にはめ込んで使えるようなスタイルが良いのでは

全部が一緒になっていたのでは使いづらいので、バインダー形式で必要な箇所だけ携帯できると良い

教育現場では個別の教育支援計画というものを作成している。保護者と一緒に記入するもの

で、学部・学年が変わっても継続して使ってゆく形式。サポートブックを作るうえで参考に
していただければ

サポートブックに関しては、保護者の方が記入しやすいものが良い

サポートブックに関しては、まずは何のために使うのかという目的がはっきりしていないと
いけないと思う。例えば、デイサービスやショートステイに行くのであれば分厚いものは必
要ない。また、パニックになったときの対応などを支援者がひと目見てわかるものであるべ
き。

にじいろ手帳の様なマル印をうてば良いような、記入しやすいフォームであると良い
サポートブックを記入することでお母さんを子どものことを見つめ直すことができた事例が
ある。

成長記録として使うのか、携帯して使うのかという用途と目的、記入のしやすさ

サポートブックは基本的にお母さんに書いてもらうもの。お母さんのメリットは主に2つ。
書くことによって子どものことを見直すことができることと、誰が見ても関わり方がすぐに
わかるようということ。

お母さんにも研修が必要。セットでできると良い。

形態はポケットに入れられるようなコンパクトな方が良いと思う。

春日井市では事業所・母子通園施設が個別支援計画をファイルして共有するということをし
た

岡崎市療育施設では OT・PT 訓練の記録を支援者側がファイルして学校などまでつないでゆ
く取り組みがある

記録しやすい方が良い。書き方見本があると良い

園での連絡帳が書けてない実態から、記入は支援者がしたが良いのか

×式は記入しやすいが、それだけではわからないこともある

作っても本当に活用されるのかが心配

事業所管理ではなくてお母さんが管理されるまで行ってほしい

記入しやすいということ、携帯しやすいということ、共通した認識で見れるものであること
その為には記載してある文章にも配慮する必要がある（にじいろ手帳は「自閉症」と直接
的な表現がある）

総括

様々な意見が出たが、検討すべき主なポイントとしては、

記入のしやすさ

携帯のしやすさ

書く内容

の3点が挙げられる。各委員、引き続き吟味して第4回に持ち越し、検討してゆく。

4．次回について

日時：1月19日（水）9：30～

場所：未定

内容：1．既存の社会資源を活用した子育て支援の方法について
2．サポートブックの作成について

発達支援部会（22年度第4回）会議録

開催日時：平成23年1月19日（水） 9：30～12：00

場所：一宮市役所尾西庁舎 西館3階 第3会議室

<本日の議事>

1. 各機関の現状分析（子育て支援課・保育課）

2. サポートブック作成について

1. 各期間の状況と課題（子育て支援課・保育課）

それぞれ今年度の資料を参考に状況を説明

- ・保育園入園までに支援機関を利用していない方も多い

（保健士からの助言があったが支援機関を利用しなかった等）

必要な支援を受ける機会がないまま就学まで進むケースも

- ・入園、就学時における事前情報が不足しがち

各機関が連携できていて情報伝達できている例もある

- ・園の選択、決定の為の情報提供が必要（子育て支援センターには各機関のパンフレットを常備）

- ・支援センターに通っているとお母さん同士の口コミによって情報が得られることも多い

乳幼児期から連携のマニュアル化ができていたら良い？

- ・各指定園でエリアが決められているので、そこを緩和して、保育園で一緒に過ごした友達と一緒に同じ地域の小学校へ上がれるといい

- ・一宮市の指定園は、必ず「落ち着ける部屋」を設けているということは良い

指定園の数を増やし、各校区に1箇所整備できれば・・・

2. サポートブックの作成について

前回の会議で話し合った中で、ポイントとなったのは主に以下の3点であったので、これらを中心に議論を進めていきたい。

記入のしやすさ

携帯のしやすさ

書く内容

また、配布資料の「生活支援手帳」と「すまいるファイル」も参考に検討してほしい。

各委員の意見

「書きやすいもの」を目指すうえで、記入の仕方としては、文章形式ではなく、メモ書き程度で把握できるものが望ましい。

サポートブックの作成に取りかかる際は、まずは目次の項目立てをして、そこから必要、不必要を吟味して作ってゆくと良いのではないかと。

こうした取り組みは全国的にたくさん行われているので、参考資料を探してたくさん集めすぎると迷いが出てきてしまうので、今手元にあるもので検討してゆけばいいと思う。

記入のしやすさは大切。記入に抵抗を感じたり、文章をかくことが苦手なお母さんもいるので、段階別にチェック項目で記入できて、補足としてメモが書ける所も用意しておくとのではないか

お母さんも知的に障害をもつ方もいらっしゃるので、2部構成を提案。

前半はチェック項目の形式で、どんな人でも書ける、読める、易しいもの。後半は詳細を記入できる様式にしてはどうか。

また、記入の仕方の説明ができる機会があると良い。お母さんが問題意識を持ってやれないと活用されない。

手頃感、持ちやすさがあると良い。

母子手帳でも数か所しか書かれていないこともあるので、書き方を伝えてゆかないと、なかなか活用できないと思う。

(生活支援手帳の様な)冊子にすると余分なものがたくさんついている感じを受ける。

形態として、やはりファイル形式にしてその時必要なもの綴じておけるものが良い。

「配布」というよりも「一緒にやりましょうよ!」という姿勢で。

作った以上、活用されるものであって欲しい。

項目に関しては、どの参考資料もほぼ共通しているので同じで良いと思う。記入方法はチェック式に賛成です。

形態は、お母さんが書きたいことと、支援者が見たい内容が異なることもあるので、全体が見れる様に冊子としてまとまっても良いと思う。

「生活支援手帳」を相談支援の現場に置いてあるけれども、今まで持って行ったのは1名だけ。一緒に記入するなどして書き方の説明をしないと活用されにくいと思う。

形態としては個人情報が入り込んで書かれてあると紛失が怖くて支援者が気軽に持ち出せないなので、必要な部分だけ取り出せるファイル形式が良いと思う。

記入の方法や内容についてはみなさんと同意見。どうすれば活用されるのか、というところで、使用する機会を増やす取り組みをしてはどうか。現状サポートブックをお母さんが活用する機会は進学時や新しく福祉サービスを利用する際などの「節目」の時期に限られており、1年に多くても2回程度。その都度まとめて情報を記入しなければいけないから書きたくなくなるのでは?各機関が「サポートブックを持ってきてください」と声をかけ、こまめに使

う機会が増えれば身近なものとして活用されてゆくのではないかと思う。

記入項目が多いと膨大な量になって負担を感じる。お母さんとしては母子手帳を書くのが精一杯。負担感を下げるために内容を最小限にまとめることが必要。

お母さん達がサポートブックを手にする時期は「若い」ので、若い人が書きたくなるように内容を配慮すると良いのではないか。また、空欄があると全部書かなくてはいけなく感じるので、チェック式などできるだけ空欄が発生しないものだと良い。

サポートブックの使われ方として、各機関合意のもとで制作するのだから、皆で活用を勤めて、「ブックを見せていただければその情報をもとに配慮いたしますよ」ということを伝えていきたい。

制作作業としては、作業部会を作ってたたき台を作り、そこから細かく検討してゆくというやり方をしてはどうか。

ブックの形態について

それぞれブックを手に入れる時期は違う。(診断時、乳児期、幼児期、学齢期・・・)

そうなる冊子よりもファイル形式の方が良い。

様式をホームページ等から取り出せるようにして、高齢になっても使える様に各ライフステージごとに様式を用意しておく

4. 次回について

作業部会の件も含め、検討してゆく

日時：2月16日(水) 9:30～

場所：一宮市役所

内容：1. 各機関の現状分析

2. サポートブックの作成について

発達支援部会（22年度第5回）会議録

開催日時：平成23年2月16日（水） 9：30～12：00

場所：一宮市役所 6階和室

< 議事 >

1. 提案事項

2. サポートブック作成について

3. 講演会の企画

1. 確定診断前の早期発見チェックリストの提案

滋賀で行われたフォーラムの中で紹介された確定診断前の早期発見チェックリスト、「M-CHAT」を一宮市で取り入れてはどうか？

M-CHAT

アメリカで開発された早期に自閉症を発見するチェックシート。検査時期は1歳半がベストで、23問の質問に答えるだけで90%の精度で自閉症を予測できると言われる強力なツール。

医師が確定診断しづらい1歳半の段階で自閉症の可能性の高さを判定する有効な方法ではないだろうか。

早期に介入して適切な支援に結び付けることができれば、後々の社会適応に大きな違いが出てくることが期待される。

メリットとしては少ない項目数で検査できること、重度からアスペルガータイプの子まで、自閉症全般をフォローできることが挙げられる。

診断はつかなくても、チェックで可能性を指摘されれば、その情報を基に学校でのクラス編成に活用できる。（自閉傾向のある子ばかりが固まるクラスにならない）

各委員の意見

1歳半検診と比較して

- ・ 検診の問診表にはここまでの項目はない。発達の気になる子は2歳の段階で確認をしている。
- ・ 1歳半検診の現場では1時間に60人程診るので、気になる子を丁寧に確認するのは難しい。2歳の確認の段階であればチェックシートの利用は可能かもしれない。

仮に導入したとして、みえてくる問題点

- ・ チェックのタイミングが1歳半だと、シートを使える場所がかなり限定される
- ・ あまりに早期なので、お母さんが受容しにくい 療育につながらない恐れ
- ・ 受け入れ施設がない（継続児が増える）

現在は2歳の確認の時点から母子通園に通ってもらって、3歳で就園、という流れだが、

1歳半から通園施設に行くと半年分通園児が増えて、施設のキャパが足りなくなる。

現状の社会資源でできること

- ・場所を新たに作るのは難しい。今あるものでできることは何か？
- ・大切なのは、お母さんが「気軽に」行ける場所であること。
- ・チャイプは敷居が低く、通園施設よりも気軽に行ける場所。しかし開催日が少ない。
- ・子育て支援センターは自宅から近くて、気軽に行ける場所。しかし内容はあくまで「子育て支援」であり、「発達支援」ではない。
- ・支援センターの中に発達支援の場を作れないか。
- ・チャイプのような場所がたくさんあると良い。

M-CHAT に関しては持ち帰って検討。保健センターで他の職員の意見も聞いてみてほしい

2. サポートブックの作成について

実際にブックの作成に入る。まずは項目を決定。

参考資料の項目を基に、必要なものを抽出してゆく

前半部分の項目がおおむね決まる。残りは次回以降検討

3. 講演会の企画

歯科医師の森先生に講師依頼をお願いして、支援者、保護者向けの講演会を企画
発達支援部会主催で、日程は後日打ち合わせする。

4. 次回について

先進地での実践現場を見学

行き先：瀬戸市発達支援室 14：00頃到着予定

3月16日(水) 12：30に尾西庁舎北側駐車場に集合

移動は福祉バスを利用する

発達支援部会（22年度第6回）会議録

開催日時：平成23年3月16日（水） 12：30～17：00

先進地視察

場所：尾西庁舎出発 瀬戸市発達支援室（福祉バス借用）

1. 瀬戸市発達支援室見学

室長より設立の経緯及び事業の概要の説明

質疑応答

- ・ 組織としてはどこに所属するのですか
「健康福祉部子ども家庭課発達支援室」です。しかしながら子ども家庭課では対象が18歳までなので、将来の就労などの継続した支援には今のところ対応できません。
- ・ 18歳までとのことですが、高校生の相談の実例はありますか
実例はあるが、年齢を重ねた方のケースは2次障害などが起きており大変複雑な状況です。やはり早いうちに支援を開始することが大切だと思います。
- ・ 親子支援教室「ひよこ」での保護者との関わり方について
保護者はどうしても否定的な見方になってしまうので、それを前向きな方へもってゆきます。回数を重ねるごとに次第に肯定的な見方に変わってゆかれます。
- ・ 父親の参加はありますか
あります。お父さんが参加されると、療育の進みが早いです。
- ・ 近隣の病院に専門の医師はいるのですか
近隣の病院とは連携がとれているが、診断できる専門機関となると、名古屋や尾張旭の病院を紹介しています。
- ・ お母さんの障害の受け入れがづらい場合は
決して無理強いすることなく「待つこと」が大切かな、と思います。

2. 次回について

サポートブックの内容について具体的に検討する

日時：4月20日（水）9：30～

場所：一宮市役所

内容：1. 各機関の現状分析

2. サポートブックの作成について

発達支援部会（23年度第1回）会議録

開催日時：平成23年4月20日（水） 9：30～11：30

場所：一宮市役所 7階会議室

新年度をむかえ、メンバーが2名交代

< 議事 >

1. 瀬戸市発達支援室見学の感想
2. M-CHAT について
3. 各機関の情報分析（学校教育課）
4. サポートブックの作成
5. 講演会企画
6. チャイプ報告

1. 瀬戸市発達支援室見学 各委員の感想、意見

- ・課題はたくさんあると思うが、各部署（学校、社会、地域）が同じ方向を向いていると感じた。
- ・発達障害に関することを1か所取りまとめているので、窓口としてわかりやすい。
- ・医療機関、専門機関よりも足を運びやすい場所であるためか、多くの方が相談に来られ、ライフサイクルでのつなぎ目がスムーズに繋がっている。
- ・発足して間もないにも関わらず、市の中に根付き認知されている。
- ・「ひよこ」の内容が非常に手厚い。市の規模が異なるので、同じものを一宮市にそのまま当てはめることは難しいが、1つのモデルとして職員の人員配置等が参考になると良い。
- ・NPO との連携などを通して、啓発をしているからこそ地域に定着しているのだと感じた。
- ・人材を重視することで、とても経験豊かなスタッフが揃っている。
- ・一宮も福祉サービスなどの利用できる機関をもっとPRしてゆくと良いのではないかと感じた。
- ・子育て支援の目線から療育にスムーズに繋げてゆけることができている。
- ・時代と共に必要とされる支援や機関は変わってゆく。今のニーズに合わせて、一宮市も再編する必要があるのではないか。
- ・図書館が大変充実していた。ただ置いてあるのではなく、お母さん、お子さんの現状に合わせて職員が適切な本を紹介することで、よく借りられているとのこと。

2. M-CHAT について（保健センターより）

検診の項目の中には同様の項目もあり、検診の場面で大まかな拾い分けはできている。

M-CHAT を使うとすれば、1歳半の事後指導の段階

厚生労働省のホームページに大府市の事例があるので確認してみる

3. 各機関の状況と課題（学校教育課）

資料を参考に特別支援教育の現状を説明（協力員、巡回相談、通級のシステムなど）

具体的な課題

- ・特別支援コーディネーターが毎年の様になる等、支援を継続してゆくことが難しい。
引き継ぎや研修会の充実を図るなどして、支援の質を維持してゆくことが必要。

部会として取り組める課題としては、「他機関とのネットワークの構築と情報交換」が挙げられる

現場の先生方が情報を知っていただくにはどんな方法があるか？

- ・福祉課は年に1回、養護学校等へ行ってサービスや制度についてアドバイスさせていただくことがあるが、一般の学校にもあると良い。
- ・新たにシステムを作ることは難しいので既存の会議や研修会を上手に活用する方法を考える
コーディネーター会議、現職研修、県の教育センターの研修など・・・

4．サポートブックの作成

それぞれの項目ごとに担当を分担してフォームを作成する

生まれてから入園まで	保健センター
幼児期・就学前	保育課、子育て支援課
学齢期	まごころ
青年期	チャイブ

その他の部分は MOVE にて検討、作成。 次回までにワード形式で作成し、福祉課にデータを送る

5．講演会の企画

歯科医師の森先生に講師依頼をお願いして、支援者、保護者向けの講演会を企画

- ・日程は9月の第3水曜日で調整
- ・7月の広報に掲載 合わせてチラシ等を作る

6．療育サポートプラザチャイブ 22年度の実態数報告

次回について

日時：5月18日（水）9：30～

場所：一宮市役所 7階会議室

内容：1．各機関の現状分析

2．サポートブックの作成について

発達支援部会（23年度第2回）会議録

開催日時：平成23年5月18日（水） 9：30～11：30

場所：一宮市役所 7階会議室

< 議事 >

1. M - CHAT について
2. 乳幼児期の課題の整理
3. 自立支援法に代わる新法体制の案
4. サポートブックの作成
5. 講演会企画

1. M - C H A T について

健康づくり課より

- ・ 検診の質問項目自体を変えることは、今年度中は難しい
- ・ 大府市の実践を参考に、実現可能かは持ち帰って検討

2. 乳幼児期の課題の整理

乳幼児期から学齢期まで各機関で発表してきたが、問題点を改めて検討

行き先の不足

- ・ 発達障害のフォローの数が増えてきているが、つなげる機関が足りない（健康づくり課）
- ・ 就学に向けた療育の回数を調整して対応しているが、行き場の確保という面では回数が少ない為充分ではない（チャイプ）

民間児童デイの実態

- ・ 行き先不足の解決策のひとつとして、民間の力を借りる（児童デイ事業所）方法が挙げられるが、その内容にばらつきがある
- ・ 事業所の数は多いが、「預かり」の事業所（ 型）が多く、「未就学児の療育」の事業所（ 型）は経営面が厳しく、数が少ない

母子通園と児童デイの違い

- ・ 母子通園を官がやるべきものならば、不足しているのなら公共事業として新たに作らなければならないし、民間で補えるものならば体制を整備してゆくべき。
また、発達障害など、実際には母子通園にふさわしいのか、ふさわしいのであれば母子通園の数を増やさなければいけないし、ふさわしくないのであれば発達障害に対応した場所づくりが必要になってくる。
- ・ 利用者は年度の前半は少なく、後半は多い傾向にある。知立市では年度の後半にもう1つ枠を増やして対応しているが、そういった工夫が出来ると良い。例えば保健センターが、年度の前半は児童デイ中心で紹介し、後半を母子通園中心で紹介する、といった方法はどうか。
- ・ 保健センターでも少しずつ紹介する場所として母子通園だけでなく、児童デイという選択肢が

あるという認識ができてきている

次回は児童デイ各事業所より事業の内容を中心に発表

3．自立支援法に代わる新法体制の案

平成24年度より施行される新体制について説明。児童デイサービスは療育型と預かり型がはっきりと区分される

児童デイや相談機関など枠が多くあるが、実際にお母さんが、何が本当に必要なのか理解して使われる方が少ない。親や教員など周囲の大人側の理解を深める必要を感じる。

- ・一宮市の場合、窓口が分かりづらい。各機関、窓口をわかりやすく、わかりやすい言葉で提示（リーフレットなど）してゆく努力が必要

4．サポートブックの作成

各機関より提出されたフォームを検討。

生まれてから入園まで

幼児期・就学前

学齢期

- ・専門的な表現を避けながら、書き込みやすいものにしてゆく
- ・日常的に必要なものは別に作成するので、各項目に関しては丁寧な内容
- ・形態はバインダー形式でA5サイズ程度。したがって原稿作成は今のままのA4フォームで作成してゆく。

次回までに今回提出されたフォームの修正点を考えておいて下さい。

5．講演会企画

森歯科医師の講演会

案内は9月広報にて

内容は「**発達障害児の口腔衛生について**」

次回について

サポートブックの内容について具体的に検討する

日時：6月15日（水）9：30～

場所：一宮市役所 5階第2会議室

内容：1．各機関の現状分析

2．サポートブックの作成について

発達支援部会（23年度第3回）会議録

開催日時：平成23年6月15日（水） 9：30～11：30

場所：一宮市役所 5階会議室

< 議事 >

1. 児童デイサービスの情報提供
2. サポートブックの作成
3. その他

1. 児童デイサービスの情報提供

委員が直接関わっている3事業所より事業内容を中心に紹介

市が配布しているリストから、その他一宮市の児童デイサービス事業所について紹介

- ・利用定員、送迎の有無、実施時間、実施地域などの運営方法及び提供される療育内容については各事業所の理念や経営事情によって大きく異なる
- ・利用できる事業所数は年々増えてきており、複数の事業所を利用されるケースが目立つ。反面、お母さん達が情報過多になっており、かえって利用の仕方や子どもとの接し方について迷いが生じてしまっていることが少なくない

委員の意見

- ・発達障害への理解の啓発を行うことで支援の方向性の食い違いを防ぐ
- ・支援の基本線は親が作るもの。その基本線ができていない為に様々な支援者の言葉に迷いが生じてしまうのでは？子どもが小さいうちからコーディネーター等が基本線作りの助言ができれば
- ・せっかくサポートブックを作っているのに事業所間の連携に活用できないか
- ・サポートブックの中に学校や事業所が情報共有できるスペースがあると良い
- ・サポートブックに各サービスの機能を明記する（本来のサービスの使い方）

2. サポートブックの作成

今回新たに提出されたもの

- ・成人期
- ・生まれてから入園までの時期（訂正版）
- ・学校で使われている「日常生活チェック表」

それぞれ作り方がバラバラで、重複した項目が多い。

一度データを福祉課が取りまとめて、内容、項目を整理する。

3. その他

稲沢の発達支援室の活動の新聞記事報告

森歯科医師講演会進捗状況

M - C H A Tについて大府市より情報を得られました

次回について

サポートブックの内容を中心に検討する

日時：7月20日（水）9：30～

場所：一宮市役所 2階大会議室

- 内容：1．児童デイサービス以外の福祉サービスについて（福祉課）
2．M - C H A Tについて大府市から得られた情報（健康づくり課）
3．サポートブックの作成について
4．森歯科医師講演会の内容について